

日本の針路、この考えはどうだ！ 『「生きる力」を育む教育的「情報インフラ」』

大阪大学大学院 文学研究科 博士前期課程1年

涌井 萌子
わくい もえこ

目次

目次	18	教育的「情報インフラ」―2022年度新学習指導要領における「論理国語」の新設	23
はじめに―「生きる力」	20	「論理国語」における「人文学研究」方法論の利用	24
情報・印象操作の歴史的事例―17世紀フランスにおける「マザリナード」	20	① 創り出した「支持者」と判断誘導	24
現代情報化社会と「情報インフラ」	21	② 修辞学・弁論術の利用―「詭弁」	25
情報活用能力を涵養する教育―高校歴史教育における実践例	22	「生きる力」と官学連携―「論理国語」と「人文学研究」	26
官学連携による教育的「情報インフラ」―「論理国語」と「人文学研究」	23	終わりに―研究者として、社会人として	26
		補足資料	28
		参考資料	33

梗概

21世紀以降を生きていく「市民」にとって「情報」に対する読解力や応用力、それらを利用しようとする際の危機管理能力は必須の「生きていく力」である。「情報インフラ」とは物理的に社会の構成員と情報化社会への参加者とを限りなくイコールに近づけようという取り組みを指す言葉であるが、「インフラ」として整備すべきは、ただ単に確保すべき衣食住の三要素に「情報」という四つ目を付け足すことだけなのだろうか？急速な情報化のデメリットとして起こった事件は、科学技術としての「情報インフラ」が先行して、その科学を使う人間の技術を整える「情報インフラ」が後方に置き去りにされていることに起因しているように思われる。ネットワーク上に存在する情報を適切に価値づけ、判断に生かすという「情報活用能力」を養うことこそ「情報インフラ」に今必要なことなのではないかと思う。

2022年度新学習指導要領で新設される「論理国語」で生徒が身に着けるのは、実社会に必要な国語の知識や技能とされており、情報としての文章を読解し理解する「リテラシー」を育む要素を加えられるのではないかと考える。現在示されている「論理国語」は実生活で活用される力として、文章の内容を重要度や抽象度によって適切に分類、整理できるようにすることを指しているが、情報読解・分析に偏って

おり「生きていく力」としては不十分だ。生きた情報活用能力を鍛えるため、教育用に新たに、実生活に存在するSNSや新聞、ネットニュースといったものの擬似教材を作成する必要がある、それらの教材の作成や授業パッケージの作成には、論理学や文献学に携わる研究者や図書館司書、あるいは大学や国会図書館等の機関の監修を受けて整えることができる。私も一研究者として、そして何よりもまず一社会人として、今後の情報分野における日本の国力に大きく影響するだろう「教育」に積極的に関わっていきたいと思っている。

はじめに — 「生きる力」

2020年度以降、順次各教育課程において新学習指導要領が導入されていくにあたって文部科学省が標語として掲げているのは「生きる力」学びの、その先へ¹である。「生きる力」とは何であろうか？「人生百年時代」と謳われ、医療分野や日々の生活を支える技術開発分野等の目覚ましい進化によって人間の寿命が延びている今日において、「生きる力」は単純な生物的生理的意味にとどまらない。小学生の時には自宅にデスクトップパソコンが設置されており、遠方の学校に電車を乗り継いで通う中学生になると携帯電話を持つようになり、高校進学とほぼ同時期にSNSを利用するようになった私にとって、電子機器を用いて情報の世界にアクセスすることは、判断力の形成されるいわゆる「人格形成期」においてはやや当たり前になっていた。そんな私にとって重要と考えられる「生きる力」とは「情報を利用し自立的に判断する力」である。

21世紀以降を生きていく「市民」にとって「情報」に対する読解力や応用力、それらを利用しようとする人々への危機管理能力が必須であることは、イギリスEU離脱国民投票におけるSNSデータを分析して得た大衆の「志向」を利用した政治行動²や、本年1月の台湾総統選挙における中国による

SNSへの情報操作を用いた選挙介入³が取りざたされる今、あなたがち「絵空事」でもない。情報操作と判断誘導はもう始まっている。情報を用いた個人あるいは社会の判断に影響を及ぼす戦略に対して「良い悪い」の議論をしている暇はないほど、個人レベルでの対策が急務である。

情報・印象操作の歴史的事例

— 17世紀フランスにおける「マザリナード」

情報・印象操作は何も今に始まった話ではない。私が高校1年生から、現代情報社会との関連の中で興味を持って研究に取り組んでいる、17世紀フランスにおける情報戦の事例「マザリナード（*Mazarinade*）」について、その歴史的事例として取り上げたい。

フランスにおいて、政治的内乱に武力だけではなく「言論の力」が多分に介入した事例は歴史上、3回ある。そのうちの2回はカトリックとプロテスタントの「宗教戦争」、日本で最もよく知られたフランスの史実「フランス革命」であり、短期間に多くの政治的性格を持つテキストが横行したが、それら以上に短期間に多くの「政治的パンフレット」が飛び交った太陽王ルイ14世の幼少期に起こった全国規模の内乱「フロンドの乱」である。この内乱では、乱に参入する各政治家

が自陣営の印象をよく見せたり、敵対する陣営の印象を悪く

見せたりするために「マザリナード」というパンフレットを

用い、1648年から1653年の間に内乱勃発地であるパ

リを中心にした5600程度のパンフレットが飛び交った。この

フロンズの乱という内乱で武力だけでなく言葉の力で戦おう

とした手段がこのマザリナードというパンフレットである。

このパンフレットは匿名であることが多く、また嘘や潤色に

溢れており、己の政治的・道徳的主張をマニフェストするこ

とに特化している。お気づきであろうが、性質としては現代

のSNSに近い。ただ、あまりにその内容が一時的な効果を

求めたものであり、情報的に信憑性が低いことから長い間歴

史研究からも文学研究からも無視されてきた。しかし、この

いくら中身が嘘であろうと、嘘はゼロからは生まれえない。根

底となる事実がある。事実を捻じ曲げるといふ行為の裏に、

それを行う意志の存在という真実がある。情報の確性が低い

マザリナードを、歴史にてらし、嘘と真を選び分け、情報の

恣意的な操作を見破るといふ方法を見出すことこそが、この

歴史学とも文学とも社会学ともつかない研究が現代社会に対

して行う、最大の貢献となり得ると考える。つまり、「マザ

リナード」研究は17世紀をつぶさに見ながらも、21世紀以降

の社会において必要な情報活用能力を備え、いのちの使い方

ているのである。

現代情報化社会と「情報インフラ」

さてここまで、現在行っている17世紀フランスに関わる文

学・歴史研究に引き付けて議論を進めてきたが、「日本の針路、

この考えはどうだ！」というテーマに則り、現代日本におけ

る具体的な「温故知新」の施策について、研究者の一人とし

て、中高教員免許取得者の一人として、そして何より社会の

一員として提言したい。

「情報インフラ」という言葉がある。情報システムを稼働

させる基盤となるコンピュータなどの機材、ソフトウェア

やデータ、通信回線やネットワークなどの総体を指すその言

葉の意味は、草の根まで電気と電波とインターネットを引き、

社会の構成員と情報化社会への参加者とを限りなくイコール

に近づけようという取り組みであるように思う。「インフラ」

として整備すべきは、ただ単に確保するべき衣食住の三要素

に「情報」という四つ目を付け足すことだけなのだろうか？

結局、SNSによる安易な人と人との結びつきが問題になる

事件や意図的な情報操作によってあらぬデマが流布するとい

う事件等は、科学技術としての「情報インフラ」が先行して、

も三步も後方に置き去りにされていることに起因しているように思われる。社として何らかの方針を持つ報道各社はさておき、「情報が自由自在に行きかっている」と社会一般に信用されているプラットフォームの方で、情報の質を判断し制限をすることは不可能であるし避けるべきである。あたかもそのプラットフォームに存在する情報がこの世のすべてかのように錯覚させかねないからだ。プラットフォームが同質に扱う情報の中で、「公私」の問題同様、その区別をつけるのは現時点では、個人の判断力に依存している。だからこそ、その情報を適切に価値づけ、判断に生かすという「情報活用能力」を養うことこそ「情報インフラ」に今必要なことなのではないかと思う。

情報活用能力を涵養する教育

― 高校歴史教育における実践例

現在、情報にアクセスする個々人の力量にゆだねられている「情報活用能力」を広く「インフラ」として涵養する場として、最も適しているのはやはり公教育であろう。情報化社会に生きていく若者にプログラミングを学ばせようというの試みと同時に、生きていくに必要なこの「情報活用能力」を育む試みも必要なのではないか。

さて、私は今から二年前に中学社会科・高校地歴科の教員免許を取った。教員免許はご存知の通り、数週間の教育実習期間を経験しなければならないのだが、高校世界史を担当することになった私はこの期間に「生徒に正しく世界史を教えること」だけでなく上記の「教育の場で情報活用能力を涵養すること」を試みた。社会科という科目は数学や理科以上に、教員の色が反映される科目であること、教員という立場が生徒の思想信条に時として大きな影響を与えることについて十分注意し、担当教員の許可を取った上での取り組みであることを一言断っておく。

論末に付した表及び付属資料は、高校一年生の必修世界史の授業で「中世ヨーロッパ世界」の範囲を扱った回の授業計画表である。この教育実習を行った当時、ニュースではしばしば、「IS」という単語と共にイスラム教とキリスト教との対立関係が取り上げられていた。実習校がミッションスクールであったことも、イスラム教に外からの敵という印象を与えがちな西洋中心主義について触れる一つの要因であったが、最も重要なのはイスラム教やキリスト教という具体的な事例についてではない。「教科書」という生徒がニューtralであるとア priori に認識している情報媒体に対して疑念を持たせ、自分自身で複数の媒体を比較して判断を形成するべきだと認識させることである。そのことについて

ては「十字軍の教科書記述に見える、教科書の視点の偏り」という題をつけている授業の最後に、直接生徒たちに手を動かして、判断を促している。教科書記述と補助プリントを参照させ、教科書記述のみだった場合と、プリントの聖書への言及・イスラームから見た十字軍への言及があった場合のイメージの違いを認識させた。この取り組みで生徒に求めたのは「平等だとして提供されているあらゆる情報への懐疑の姿勢」であり、日常生活においてある事件やニュースについて一つのメディアから情報を得るだけでなく複数を見比べる必要性の認識である。

講義形式の授業であり、受講人数が45人程度いる高校一年生の世界史の授業では、資料を提示し生徒に呼びかけを行うにとどまったが、受講人数が10人程度の高校三年生の選択世界史の授業では、資料提供だけにとどまらず、生徒自身で『情報源が一つだけであった場合の印象』と『複数あった場合の印象』との違い」を記述させ、世界史の授業において授業時間制限などの関係上、教科書や扱う内容を制限せざるを得ないように、ニュースや報道においても情報の記述方法や内容量に制限があるという限界を踏まえて、実生活においてどのように情報を探すべきか、その情報をどのように用いるべきか、グループディスカッションとグループごとの提言を行った。

学年や人数ごとの授業形態の変化は一定の効果も認められたものの、やはり「社会科」の枠組みの中で行うことには限界を感じた。

官学連携による教育的「情報インフラ」

—「論理国語」と「人文学研究」—

教育的「情報インフラ」——2022年度新学習指導要領における「論理国語」の新設

上記の例は、教育実習校が私の信義信条に基づく「自分勝手」を許容したために実現しえた一事例にすぎない。往々にして公教育とは平等の質と量を提供するのが理想だが、「当たり前はずれ」が存在し、担当する教師の思想信条や人格にかなり影響される不平等なものであるのが現実である。上記の例は、ある年のある学校の高校生約150人程度が受けた特殊な体験で終わってしまったわけだが、今後の加速する情報化社会の中を生きていくすべての生徒に共通の体験として「インフラ」として広めたいと考えた場合、やはり「リテラシー」という分野に含まれることになるだろう。

2022年度に施行される新学習指導要領の高校国語で、選択科目に既存の「国語表現」に加え、現行の「現代文」と「古典」を再編した「論理国語」「文学国語」「古典探求」の

計3科目が新設される。「論理国語」で生徒が身に着けるのは、実社会に必要な国語の知識や技能とされ、それを適切に使うことができるようにすることを論理的な思考力の育成につながる情報の扱いなどを学ぶと設定されており、ここに文章を読解し理解する「リテラシー」をはぐくむ教育としての要素を加えることができるのではないかと考える。論文・レポートのような論証のための文章や、法令・契約書のような客観的な内容を一義的に示すための文章を題材に取るこの「論理国語」において身に着ける「文章に含まれている情報の扱い方」として「主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること」「情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと」「推論の仕方について理解を深め使うこと」が挙げられている。

おそらく論理学などの理論を学び、実践としてテキストを学び推論するという授業形態が見込まれるが、実生活において活用される力としての「文章に含まれている情報の扱い方」とは、その文章の内容を重要度や抽象度によって適切に分類し、整理できるようにすることだけを指すのだろうか？

「論理国語」における「人文学研究」方法論の利用

論理国語において身に着けるべき「実学」としての読解力

は、実は「実学」と程遠いと考えられがちな「人文学研究」にその雛形を求めることができるのではないかと考える。「人文学研究」が実学「論理国語」に貢献しうる要素について、「マザリナード研究」を具体例として提示したい。

マザリナードとは前述の通り、フロンドの乱という内乱中に出回ったパンフレットである。このパンフレットは多くが匿名であり、また嘘や潤色に溢れており、己の政治的・道徳的主張をマニフェストすることに特化しているため、情報的に信憑性が低いことから長い間歴史研究からも文学研究からも無視されてきた。自己擁護と他者攻撃の道具であるマザリナードの中で、歴史的事実を参照しながら事実を抽出して真実に迫っていくその学術的プロセスを「論理国語」に応用できるのではないか？具体的な授業例と共に挙げたい。

① 創り出した「支持者」と判断誘導

多数決によって物事が決まってしまういく民主主義において「どれほど支持者がいるか」ということはかなり重要であり、特にその人個人にとってそれがいいかどうかよりも大勢の「他者」の意見に流されることが多く、その性質を利用して購買行動にまで影響が出る日本⁴においては、政治の場面でなくとも「支持者がいるかないか」というのは潜在的に判断基準の一つとなってしまう。

創り出した「支持者」という存在については、マザリナードを用いた内乱における言葉の政治闘争においても見られる。⁵ 実際フロンドの乱において、マザリナードを自己弁護として用いたり、政敵コンデ大公の攻撃に用いたりしたレ枢機卿 (Jean Francois-Paul de Gondi, Cardinal de Retz) はパンフレの中で、レ枢機卿自身として語りを行うことはない。ある時はレ枢機卿を擁護する人物によって書かれたという体裁を取って、⁷ またある時はレ枢機卿とコンデ大公の間で中立であり、世間の騷擾を憂い、平和の使者としての役割を果たすために山を下りてきた「隠士」という体裁を取って語るが、⁸ 語り手の異なるどのパンフレを見ても「利己的なコンデ大公」と「利他的なレ枢機卿」という二項対立の中で自分の正当性を主張するという構図が取られている。レ枢機卿がこれほど自分の無私無欲を強調するのは、コンデ大公陣営によるレ攻撃のマザリナードのなかで「マザラン側への裏切りは、レ枢機卿の個人的な利益のためである」と攻撃されているからであり、レ枢機卿にとってこの点は自身の政治生活において重要な論点であったからである。プレイヤッド版の編者であるミシエル・ペルノは、執拗なまでに自身の潔白を繰り返し強調するレ枢機卿の記述に注目し、注において「人々 (peuple)」のなかにある自分の人気を守ろうとするために無私無欲を強調している」と言及している。

この例を踏まえて「論理国語」に活用するならば、SNSにおける「創り出した」支持者」を用いた誘導の例や、ネットショッピングサービスにおける「創り出した」商品支持」レビューによる誘導、今までの検索履歴のビッグデータを用いた掲載広告による誘導などの例などを教材として示したり、より高学年になれば資料から自ら探し出して指摘させたりするなどの授業パッケージが想定される。

② 修辞学・弁論術の利用——「詭弁」

説得を目的として、時には誤っていることを正しいと思わせるように恣意的に用いられる「詭弁」は弁論術の一つである。説得や交渉、プロパガンダやマインドコントロールの手段として用いられることもあるこの弁論術については、SNSやメディア等のいわゆる「偏向報道」等への個々人のロジック武装になりうる。

例えば「早まった一般化 (hasty generalization)」は少ない例から普遍的な結論を導こうとする詭弁の論理であるが、一個人 (particular) の意見を「世論 (public opinion)」と同等に扱う報道などに見られる。都合の良い事例や事実あるいは要因の身を羅列し、都合の悪い論点への言及を避け、誤った結論に誘導する論法については、特に論じる対象となるコーパス選択および論の根拠たる論拠典拠の恣意的な操作に

対して学術的価値を問い質す「人文学研究」を含めた研究方法論との関連が大きい。

古くはローマにおける弁論家キケロまで遡る、「詭弁」を含む修辞学・弁論術を学ぶことの重要性は、文部科学省も「高等学校学習指導要領解説」において指摘している。「人文学研究」の方法論や理論を用いた「論理国語」については、上記の歴史文献を学術的に分析する際の方法論や論理学を用いた「正しい論証」を示す教材例の他に、「誤った論証」を指摘し、それらに誘導されないための力を育成するための教材も必要なのではないだろうか？ いずれにおいても「人智」を担い、正しく情報を扱うことに傑出している研究者あるいは研究方法論というのは、十二分に寄与しうるリソースであると考えられる。

「生きる力」と官学連携——「論理国語」と「人文学研究」

公教育制度を整えるのが政府である以上、特定の報道機関に対する特定の印象を誘導するような教材は使えないので、新聞や雑誌等の報道はなかなか教材化しづらい。しかし、実生活に必要な情報を読解し、判断し、利用する情報活用能力を鍛えるというニーズは今以上に大きくなっていくだろうと考えられ、その克服手段として教育用に新たに、実生活に存在するソーシャルネットワークワークサービスの擬似教材や、新聞

やネットニュースといったものの擬似資料を作成する必要性を申し上げたい。そして「生きる力」としての情報活用能力を涵養する教材の作成や授業パッケージの作成には、論理学や文献学に携わる研究者や図書館司書、あるいは大学や国会図書館等の機関の監修を受けて整えることができると考える。

終わりに

——研究者として、——社会人として

「文学研究科」に身を置いていると、歴史を学ぶことに何の意味がある？ という厳しい目にしばしば晒される。公財をいただいて研究しているのだから、当然晒されるべき視線であり、それがどういったものであれ、研究者一人一人が答えを持つべき質問であろう。

歴史を学ぶということは、数世紀前の事象をそのまま現代社会に適用することではない。数世紀前の事象を、現代社会に生かすことはないかと意識することだ。英文を和訳する際、直訳すればいいというわけではない。英文の真意を理解した上で、日本語により近い表現を求める。歴史学や文学を現代社会に生かすことはこの翻訳の作業に似ている。社会の経験を知る歴史学、社会に生きる個人の経験を知る文学を、その

まま現代社会や現代社会に生きる個人に直訳しようとするから、価値が見出せなくなる。それは当たり前のことだ。何が生かして何が生かせないか知るために、歴史学や文学を詳らかに見るのと同時に、現代社会や現代の個人を詳らかに見る必要がある。人文学は人を見、社会を見る学問であり、そうであり続ける意識を持たなければならぬ。現代社会と現代の個人を深く理解しようという努力抜きに、安易に適用してはいけないのは、何も人文学に限った話ではない。「いかに長く生きるかではなくいかによく生きるか」を考えることは学問に携わる人間に必要な態度なのではないだろうか。それが私にとっては、17世紀フランスと21世紀日本とを結ぶ「情報を用い、判断する人間にとってよく生きるとは何か」を考ええることなのである。

私も一研究者として、そして何よりもまず一社会人として、フランス17世紀を題材にした自分の研究に常に21世紀という補助線を引こうとする気概を持ち続けたい。そして可能ならば、今後の情報分野における日本の国力に大きく影響するだろう「教育」に積極的に関わっていききたいと野心を抱く、若者の一人でいたいと思っている。

①高校一年「必修世界史」授業計画

展開①		導入	過程
5分	3分	5分	時間
<p>《商品》</p> <p>ハンザ同盟の商人はバルト海のニシンなどの海産物、内陸の穀物、材木や毛皮などを仕入れて、ネーデルラント、フランドル、イングランドなどにもたらし、毛織物などの製品と交易した。またバルト海沿岸の商品は内陸の交易路を通り、シャンパーニュや北イタリアにもたらされた。</p>	<p>《商品》</p> <p>地中海東岸のレヴァント地方からアジア原産の香料や織物を輸入してヨーロッパにもたらされるようになり、さらに東方へは、初めの頃はスラヴ人などを奴隷として売りさばっていたが、後にはイタリア産の羊毛製品を輸出した。また12世紀後半からは、フランドルや北フランス産の羊毛製品が、シャンパーニュ大市を経てジェノヴァの商人に渡り、彼らによつて東方に輸出されるようになる。</p> <p>・北ヨーロッパ商業圏（11世紀）</p> <p>《形成》</p> <p>地中海商業圏に次いで盛んになった。12世紀には、ドイツ人のエルベ川以東への東方植民が盛んになるにつれて、北ドイツのハンザ同盟諸都市の商人がバルト海に進出して、バルト海貿易が盛んになった。</p>	<p>【商業圏の発達】</p> <p>・地中海商業圏（11世紀）</p> <p>《形成》</p> <p>十字軍運動に刺激され、十字軍の出発地となった北イタリアのヴェネツィア商人などによる東方貿易（レヴァント貿易）が盛んになる。</p>	<p>教師の活動</p> <p>本日の学習では商業圏の発達と演習問題の解説を用いた十字軍による中世世界の変化についての総復習を行うことを確認する</p>
	<p>形成のみ板書し、扱われた商品についてはプリントの記載と資料集で確認させる</p>	<p>プリントに記入させる</p> <p>資料集P144 商業圏の発達を同時に閲覧させる</p>	<p>生徒の学習活動</p>
			<p>指導・支援上の留意点</p> <p>教科書・資料集を用いることを伝える</p>

展開①

5分

・内陸商業圏

《形成》

南北商業圏の接触地としての役割

シャンパーニュ地方

フランスのパリの東部に位置する地方。北方の北海商業圏と南の地中海商業圏を結ぶ遠隔地貿易の商業ルートに位置し、12～13世紀に「シャンパーニュの大市」といわれる定期市が開かれて繁栄した。中心地はランス。6つの町でそれぞれ7週間ずつ、毎年定期市が開かれ、フランスの毛織物、フランスのブドウ酒、イタリヤの絹織物、ドイツの亜麻布、東方からの香辛料などが取り引きされた。

●シャンパーニュの大市

シャンパーニュ地方は、ソヌヌ・ロアールなどの河川が集まる内陸交通の要地。この地方の4つの都市で定期的な大市が開かれるようになり、地元の商人や外国の商人が多数往来し年6回、それぞれ6～7週間ずつ開催され、ほぼ一年中にぎわっていた。「織物の市」、「皮の市」、「秤の市」の順序で取引され、「秤の市」とは目方や量で売り買いされる商品の市のこと、香料・染料・塩・砂糖・果物・油脂類・金属・木材など多種多様な商品が扱われた。

●南ドイツ銀山とフッガー家

15世紀、ドイツのアウクスブルクで繁栄した豪商。ヴェネツィアとの香料や木綿、麻織物などの交易で財を築き、近くのチロル銀山の経営権を独占して銀を保有、さらにハンガリーなどの銅山の経営も行った。それらの資金を基に金融業にのりだし、神聖ローマ皇帝やスペイン王、ローマ教皇庁などにも多大な融資を行った。

総括	展開②	
7分	10分	10分
<p>【十字軍の教科書記述に見える、教科書の視点の偏り】</p> <p>●社の教科書記述を参照させ、教科書記述のみだった場合と、プリントの聖書への言及・イスラームから見た十字軍への言及があった場合のイメージの違いを認識させ、教科書が必ずしも現象にかかわったあらゆる人に平等な立場をとっていない、往々にしてヨーロッパ中心が多いことに気づかせる。そのうえで重要なのは平等だとして提供されているあらゆる情報への懐疑の姿勢だとし、当たり前を疑う姿勢が学問の始まりであり、当たり前を疑う姿勢がよりよい社会を目指す人間の根本のエネルギーであることを伝える。</p>	<p>・演習問題を踏まえた総復習</p> <p>十字軍の影響の総復習（祈る人・戦う人・働く人から祈る人・戦う人・商う人・働く人への変化や各集団同士の影響関係の整理）</p> <p>※封建制の崩壊につなげる意図</p>	<p>【演習問題の解説と十字軍の影響の総復習（都市の形成を含む）】</p> <p>・演習問題の解説</p> <p>要点のみを書きだし（配布プリント②構成）配点の状況を説明する（傍線がない↓1点減点、単語に対する説明が少ない↓1点減点）</p>
<p>教科書・プリント・資料集の三者を見比べさせる</p>		

② 高校一年生 必修世界史 補助プリント教材

付属資料 十字軍の様々な非道な行為

第一回十字軍の略奪行為 (橋口倫介『十字軍』、アミン・マアルーフ『アラブが見た十字軍』などによる)

ファーティマ朝は十字軍がイェルサレムに迫ると、単独では防衛は困難と考え、ビザンツ帝国に援軍を要請したが、その到来よりも先に十字軍が来襲した。**ファーティマ朝側は講和条件として武器を持たない巡礼者のイェルサレム入城を許可する旨を伝え攻撃を回避しようとした。しかし、十字軍側はその提案を拒否、1099年5月に宣戦布告し、7月15日に陥落させた。**その地を占領した十字軍はゴドフロワを国王としてイェルサレム王国を建てた。

イェルサレムの城内に突入した十字軍兵士は街路に逃げまどう非戦闘員も含めて大虐殺を行い、略奪をほしいままにした。アラブ側の史料に抛れば虐殺・略奪は1週間に及び、7万人以上の人々が殺され、岩のドームの財宝は空になった。キリスト教側の年代記類もこれらの残虐行為を別に隠そうともせず淡々と語っている。サラセン人という総称で、アラブ人・トルコ人・エジプト人・エチオピア人などのイスラーム教徒が殺されただけでなく、ユダヤ人も例外でなかった。7月16日の朝、十字軍士は市内の東北地区で多数のユダヤ人を駆り出し、中心街のシナゴグにとじこめ、扉を外から密閉して火を放ち、全員を焼き殺した。また、イスラーム教徒は金貨を飲み込んで隠しているというわさがあり、十字軍兵士は捕らえたイスラーム教徒の腹を割いてしらべたり、殺したうえで死体を山のように積み上げ、火をつけて灰にして金貨を探そうとしたという。

アラブから見た十字軍 (アミン・マアルーフ／牟田口義郎・新川雅子訳『アラブの見た十字軍』)

キリスト教側が聖地回復掲げて起こした十字軍は、アラブ側から見れば明らかな侵略であった。その後の千年に及び反西欧の怨念が残ることとなった。キリスト教徒側から起こされた十字軍運動が、アラブ世界(必ずしもアラブ人だけではなく、トルコ人、イラン人、クルド人なども含む)にどのように受け止められ、またその攻撃と反撃の実態がどのようであったかを詳細に跡づけたアミン・マアルーフの『アラブの見た十字軍』は、序章を「千年の対立ここに始まる」と名づけ、最終章の「アラブのコンプレックス」で次のように締めくくっている。

(引用) 西ヨーロッパにとって、十字軍時代が真の経済的・文化的革命の糸口であったのに対し、オリエントにおいては、これらの聖戦(ジハード)は衰退と反開化主義の長い世紀につうじてしまう。四方から攻められて、ムスリム世界はちじみあがり、過度に敏感に、守勢的に、狭量に、非生産的になるのだが、このような態度は世界的な規模の発展が続くにつれて一層ひどくなり、発展から疎外されていると思ひ込む。以来、進歩とは相手側のものになる。近代化も他人のものだ。西洋の象徴である近代化を拒絶して、その文化的・宗教的アイデンティティを確立せよというのか。それとも反対に、自分のアイデンティティを失う危険を冒しても、近代化の道を断固として進むべきか。イランも、トルコも、またアラブ世界も、このジレンマの解決に成功していない。そのために今日でも、上からの西洋化という局面と、まったく排外的で極端な教条主義という局面とのあいだに、しばしば急激な交代が続いて見られるのである。

指摘の通り、**現代でもイスラエルは新たな十字軍国家になぞらえられ、アラブの指導者はサラディンやイェルサレム奪回の栄光を口にす。21世紀が10年以上たっても、解決も道筋はついていない。**そろそろ、西洋と東洋、キリスト教とイスラーム教という対立軸を克服し、互いが否定し合うのではなく、そのアイデンティティを認め合う時代ではないだろうか。しかし「そして疑いもなく、この両世界の分裂は十字軍にさかのぼり、アラブは今日でもなお意識の底で、これを一種の強姦のように受け止めている。」という著者の最後の一文の重みは忘れてはならないだろう。

- 1 文部科学省初等中等教育局教育課程課ホームページ
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm)
 - 2 毎日新聞「論点ビジュアルターミネーター」
(2018/2/23, (<https://mainichi.jp/articles/20180223/ddm/004/070/014000c>))
 - 3 毎日新聞「サイバー攻撃の脅威 台湾総統選めぐり」中国がSNSで偽情報」の警戒感」
(2019/5/4, <https://mainichi.jp/premier/business/articles/20190425/biz/00m/020/020000c>)
 - 4 日本経済新聞「台湾総統選「中国選挙介入」巡り論戦 テレビ討論会」
(2019/12/29, <https://www.nikkei.com/article/DGXMZ053986070Z21C19A2FF8000/>)
 - 5 「追跡ーネット通販やらせイベント」(<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4335/>)
 - 6 「真実らしきは、たいてい『人は』(不定代名詞の on)で表される。真実らしきは『個人の信条を全体の中に潜り込ませる』(クリミアン・ジュノー『マザリナード：言葉のフロンティア』嶋中博章、野呂康訳、水声社、2012、p.120)
 - 7 « Le crière de base définissant la mazarinade, ce n'est donc pas la référence à Mazarin, c'est un rapport étroit avec les troubles : on peut considérer comme mazarinade toute publication de nature politique liée à la Fronde et parue entre l'arrêt d'union des cours souveraines du 13 mai 1648 et la paix publiée à Bordeaux le 31 juillet 1653. C'est en somme la presse politique du temps inseparable de ces guerres civiles. » (*Dictionnaire des lettres françaises. Le XVIIIe siècle, in Le livre de poche ; . Encyclopédies d'aujourd'hui*, Paris, Fayard et Librairie Générale Française, 1996, p.828.)
 - 8 マザリナード国際共同研究サイト *Recherches internationales sur les Mazarinade* では、他にも複数のマザリナードがレ枢機卿のものとして紹介されているが、中にはレ枢機卿研究者からその帰属に疑問が投げかけられているものもある。このことは、ブレイヤード版 (*Ennes / cardinal de Retz ; édition établie par Marie-Thérèse Hipp et Michel*
- 9 *Pernot, Bibliothèque de la Pléiade*, 53, Paris, Gallimard, 1984.) にペンフレ (« Pamphlets ») として収録されている中で、1648年から1653年に出版されたものを「レ枢機卿のマザリナード」として扱っている。
 - 10 Retz, *Défense de l'ancienne et légitime Fronde, Mémoires*, éd.cit., p.53-54.
 - 11 Retz, *Le Solitaire aux deux désintéressés, Mémoires*, éd.cit., p.57-58.
 - 12 ネット掲示板やネットニュースなどでは、匿名の個人の意見が一般化されるケースはしばしばみられる。

参考資料

● 参考・引用文献

フランス語文献

Dictionnaire des lettres francaises. Le XVIIIe siècle, in Le livre de poche
; .: *Encyclopédies d'aujourd'hui*, Paris, Fayard et Librairie Générale
Française, 1996, p.828

Œuvres / cardinal de Retz ; édition établie par Marie-Thérèse Hipp et
Michel Pernot, Bibliothèque de la Pléiade, 53, Paris, Gallimard, 1984.

日本語文献

クリスチアン・ジュネオー『マザリナード：言葉のフロント』嶋中博章、
野呂康訳、水声社、2012。

● HP等ウェブ資料

文部科学省初等中等教育局教育課程課ホームページ

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm)

毎日新聞「論点ビッグデータ①」

(2018/2/23, (<https://mainichi.jp/articles/20180223/ddm/004/070/014000c>))

毎日新聞「サイバー攻撃の脅威 台湾総統選めぐり」中国がSNSで偽情報「の警戒感」

(2019/5/4, <https://mainichi.jp/premier/business/articles/20190425/biz/00m/020/020000c>)

日本経済新聞「台湾総統選「中国選挙介入」巡り論戦 テレビ討論会」

(2019/12/29, <https://www.nikkei.com/article/DGXMZ053986070Z21C19A2FF8000/>)

【国語編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説

(https://www.mext.go.jp/content/1407073_02_1_2.pdf)

「追跡ーネット通販ヤラセレポート」

(<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4335/>)